

連載
第4回
石造民家再生の試み最前線
スペイン・カタロニアの伝統的石造民家マジア研究チーム

小松幸夫 ● 早稲田大学理工学術院教授
建物における存在の持続あるいは保存の意義について

(建築技術 2010年4月号掲載)

筆者は建築構法に関わっている立場なので、初めにマジアの構法について簡単に触れておきたい。前号までに述べられてきたようにマジアの構造はいわゆる組積造である。石を積み上げて垂直な壁体を構成し、床面や屋根下地(天井)面は木材を支持部材として、網状の下地材と土で平面を構成している(写真1~3)。時には補強のため、梁の間に板状の石材あるいは薄いレンガをヴォールトの形状になるよう挿入することもある。組積造の場合は開口部上部の補強が構法上のポイントになるが、マジアでは木材やレンガなどが使われている。屋根には瓦が葺かれる。なお現地ではまだ実際に住まわれているものも珍しくない(写真4)。筆者はそれほど多くの組積造を知っているわけではないが、マジアの構法には特に際立った特徴があるとは考えていない。

我々が見た調査対象はまさに廃墟であった。壁は崩れかけており、屋根や床は落ちて土砂が最下階の床に堆積していた。これらの建物には特に由緒があるとか、歴史的な意味があるというものではない。誰がいつ建てたのか、どんな人がいつまで住んでいたかもはっきりせず、市当局と建築家がほとんど偶然に選んだようなものであった。したがって今回の保存・再生は建築史的な意味は薄く、目的は地域再生の核になる施設として廃墟を再生させることにあったといえる。ではなぜ新た

に施設をつくるのではなく、再生であったのか。何のために廃墟となった建物を保存するのか。そのことを本稿では考えてみたい。ところでわが国では、最近の少子化傾向で廃校となる小中学校が増えている。そうした施設を利用して地域おこしにつなげようとする試みも各地で行なわれている。そこには学校という施設が、そこで時間を過ごした地域の人たちの記憶と深くつながっていること、つまり思い出深い建物を壊してしまうには忍びないという住民の心情が背景にあるように思われる。今回のマジアの場合、そうした心情が擬似的にせよ、われわれ異邦人の側にもあったように思われる。素朴な石積みの壁と朽ち果てた屋根や床、やや荒れかかった周囲の果樹園にノスタルジアを感じさせられた(写真5)。建物としての使命をすべて終えてしまった建物をどうするのか。経済的合理性のみを考えるのであれば解体してしまうのが最善ということになるが、なぜそれを残すのか。結論をいってしまえば、ある建築史家の言葉だったと記憶するが「記憶あるいは時間の継承」ということに尽きるのであろう。

建物を作ること・壊すこと

わが国では終戦直後に極端なモノ不足を経験した。その後の経済復興と高度成長期を通じあらかも飢えを満たすように建物は造られ続

け、同時に壊され続けてきた。そしてオイルショックを経験し、環境や資源の問題が意識されるようになって、わが国の建築界も欧米に習って長寿命化へと向かい始めている。

長寿命化をいう前にそもそも建物の寿命とはどういうものかについて考えてみたい。建物は何年もつかということがよくいわれるが、それについて適切に答えることは不可能である。財務省の定めた耐用年数が何年もつかの答とっておられる向きもあると思うが、この年数はあくまでも企業会計の減価償却のために決められたものであり、本来ならば償却年数とでも呼ばれてしかるべきものである。筆者らが建物の寿命についての実態を調査したところ、いわゆる耐用年数とはかなり異なる結果を得ているし、世界的には100年を越えて使われ続けている建物が数多くあることは周知であろう。

そこで物理的にはいったい何年もつかという話になるが、金銭的なことは別として、十分な補修や改修を前提にすれば無限の時間をもたせることも不可能ではないと筆者は考える。建物が壊されるのはおもに所有者あるいは使用者の都合によることがほとんどで、少子化による学校の廃校・撤去、敷地の転用・売却のための上物の取り壊しなどはその典型といえる。建物はそれに関わる人々の意志によって長寿命にも短寿命にもなりうるのである。



①マジア内部の床と階段。葦のような植物の茎を編んだものに土と切開を塗り付けている



②マジアの二階部分。屋根下地がそのまま天井となっている



③崩落したマジアの断面。屋根と床の構成が見える



④まだ現役のマジア



⑤ファッチェスのマジア群。周囲は果実畑



⑥工事中の旧東京中央郵便局

いま建物の寿命は所有者あるいは使用者の意志次第ということを書いたが、ここで建物と使用者の関係、より広くいえば建物と人間との関係を考えてみたい。この関係は設計時点での与条件として分析され、その分析結果に基づいて設計内容が決定されていくことは建築設計の常識である。しかしながら当初想定された両者の関係が、建物が使われ始めて以降も永久に変わらないということとはありえない。時代が移ろい人が変わっていくなかで、建物の役割は終わったとして所有者が解体することも多いが、あえて建物にその存在を持続させようとする、すなわち長寿命化のためには何が必要なのか、また長寿命化を超えてさらに建物を残すというときに(ここでは保存ということを考える)、何を残すのが問題となる。後者の最近の例としては、2009年に政治家まで巻き込んだ東京中央郵便局の保存問題がある。結果的に建物の一部を残して保存するという事で決着したが、それでは保存にならないという声も強かった(写真6)。このことをより根源的に考えていくと、そもそも建物の存在とは何

なのか、何がその建物を規定するのかという問題に行き当たる。

建物の4つの側面

われわれが建物(建築といってもよい)を語る場合、建物にはいくつかの側面があることに気がつく。工学的なアプローチでは、まず建物を構成する材料や部品などの物質的な側面に着目する。またデザイン、すなわち意匠的な面からのアプローチでは、建物全体の形態や色彩、表面のテクスチャーなどに着目し、さらに建物の内部空間の規模やつながりかたなどを決定していく。具体的な建築設計においては、それぞれの空間について用途・機能を設定して、必要な空間のしつらえを決定していくことになる。そもそも建物を造ろうとする動機にはさまざまなものがある。人間の生活に必要な機能を満たすため、つまり住むこと、教養を学ぶこと、病気を治療することなどを目的として住宅、学校、病院が造られる。その一方では神の存在を示すために神殿が造られたり、国家あるいは元首の威厳を示すために壮麗な建物が造られることもあ

る。特にこうした建物は機能を充足するというより、機能を超えてそれ自体が象徴となっていることができる。

以上を改めて整理すると、建物には資材などの物質的側面、空間や形態といった意匠的側面、用途で代表される機能的側面、さらに象徴的側面があるといえる。しかしながらどの建物もこれらの側面を等しく備えている訳ではない。それぞれの建物が生まれてくる背景によってどの側面が強調されるかが決まってくる。さらには時間の経過の中ではそれぞれの建物のもつ意味が変化し、各側面の重みもそれにしたがって変化していく。これら建物のいろいろな側面が建物の持続性とどうかかわってくるかを次に考えてみたい。

まず物質的側面について。建物がもつ・もたないという時、建物を構成する物質の劣化という現象がまず注目される。耐久性という言葉で表されることが多いが、木造であれば木材の腐朽、鉄筋コンクリート造であればコンクリートの亀裂や剥離、鉄筋の錆などである。物質的な劣化は避けられないものではある

が、同時に適切なメンテナンス行為によって回復が可能なものでもある。長寿命化の場合にはメンテナンスを含めて物質的な側面が重要視される傾向にある。

意匠的側面については、これまでもファサードを残すという保存事例は数多く、これらは専ら意匠的側面に注目した保存といえるであろう(写真 7)。意匠を本格的に論じることが筆者の能力をはるかに超えるが、建物の重要な側面のひとつであることは間違いない。意匠には空間と形態が含まれると述べたが、そのファサードが本物か否かという物質的な側面も問題になることも考えられる。意匠を評価するのに「美しい」という言葉がある。美しい建物はそれだけで存在価値があるといえるが、「この建物(建築)は美しい」という評価が常に万人に共有されるとは限らないし、また普遍的ではないこともよく経験する。さらに美しさは人を得て発見されるということもあり、たとえば桂離宮はその顕著な例として知られる。しかしながらその裏には、発見されないまま朽ちてしまった美しさが数知れずあったとも想像される。価値は発見されなければ決して評価されることはない。

機能的側面について。そもそも用途のない建物というものは、もしあるとしてもごく希であろう。モダニズムの洗礼を受けて以来、機能主義的な考え方が今に至るまで建築設計の主流になっている。現代では用途あるいは機能が建物あるいは建築空間を規定する最大のものであるともいえる。用途と機能は厳密には同じではないが、建物の使われ方を表すものであり、ある用途を実現するためにいくつかの機能が建物に付与されていると考えられる。建物の機能は空間の大きさ(ディメンション)と、空間に装備されたものすなわち内装や設備で実現されるこ

とになる。設計に際してはまず使う側の要求が与条件としてあり、それが建物の機能へと翻訳されていく。竣工からしばらくの間は使う側の要求と建物の備える機能は一致しているはずのものであるが、時間の経過につれて使う側の要求は変化していく。建物側の機能的な側面での余裕があれば使う側の変化した要求にも対応できるが、対応の限界を超えたとき「この建物は使えない」と判断されることになる。実際に建物が解体され建て替えられる理由は、物質的な側面よりこの機能的な側面の影響がはるかに多いと思われる。

使う側と建物が機能面でミスマッチを起こすようになったとき、対応としては建物を変える方法と使う側を変える方法がある。解体から建て替えという方法は、思考としては最も単純な建物を変える方法であり、かつてスクラップアンドビルドと呼ばれてわが国の建築界で多く用いられた方法である。建物はそのまま、そこで提供されている機能に合うような使い手を探すという方法は、テナントの変更あるいは中古建物の売買ということになるが、中古建物売買はどういうわけかわが国ではあまり一般的ではない。建替えによる建物全体の変更ではなく、建物内部の空間についての機能変更を目指すものが一時期かなり話題となったコンバージョンであろう。

象徴的側面について。例えば国宝や重要文化財になった建物は、それだけでその存在は絶対的なものになる。あるいは権力を象徴する役割を負わされた建物や大きな宗教的意味をもつ建物も同様であろう。建物が何らかの象徴となった途端に物質的側面や機能的側面は超越されてしまい、その存在の永続性が期待される。すなわち象徴である建物がどのような機能をもつかはほと

んど重要ではなくなり、物質的な劣化に対しては費用を惜しまず対応がなされ続けるであろう。その反面、象徴性を支える社会的背景を失った瞬間、例えば権力者の失脚や宗教的な抗争などが起きれば、象徴としての建物は政治的な意味からあつてなく破壊されてしまうことも多い。

4つの側面と保存

以上建物のいろいろな側面を個別に見てきたが、建物が長く残るための決定的な条件というものがあり得るのだろうか。有体に言えばそんなものはないということになる。物質としてまったく劣化しない材料を建物の構築に使えたとしても、もし機能的な側面で変化への対応ができなければ、そのことが建物にとつての致命傷になる。意匠面で高い評価を得られた建物であっても、好みは時代によって変化するし、また万人が同じ美的感覚を備えているとは限らない。象徴的な存在となった建物は長く残る可能性が高いといえるが、それを支える社会的背景が決して失われないという保証はない。

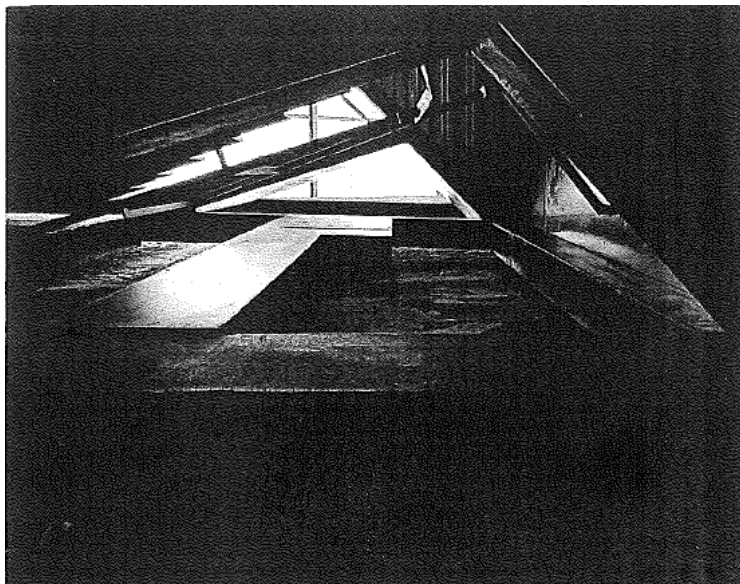
結局は建物を残そうとする意志が持続的に作用し、建物を状況に対応させていくことがなければ、建物を長く残すという行為は実現しないのではないだろうか。状況に対応させる場合、元の建物をどこまで残すのか、あるいはどこまで変えてもいいかということが問題となる。金閣舍利殿(鹿苑寺)はかつて国宝に指定されていたものであるが、焼失のちに再建された現在の建物は特にそうした指定を受けていない。屋根にある鳳凰、建物が存在する位置、意匠、機能などはそっくり元のままであるのに建物としては別物として扱われている。最近話題になっている再現された三菱一号館も同様



⑦ファサード保存の例(東京銀行協会ビルディング)



⑧再現された三菱一号館



⑨残存遺構と新設架構が独立して接している部分

提供:早稲田大学入江正之の研究室

である(写真 8)。他方法隆寺の金堂は最古の木造建物といわれているが、長年にわたる補修で建物を構成する物質は相当部分が入れ代わっていると想像される。また意匠的にも当初の姿から変更が加えられていることが明らかになっている。建物として見た場合、現存の金閣はいわば本物としては扱われておらず、法隆寺金堂はまぎれもない本物とされている。この違いは何に由来するのかを考えたとき、鍵はその建物を構成する物質が備える時間の継続性にあるように思われる。ある建物が解体などによって建物としての存在の継続が途切れてしまったとき、あとからもとの建物をどれほど忠実に再構成したとしても、再構成されたものは別の建物と認識されるのではないか。この問題は建物を残すというときに大きな示唆を与えるように思われる。建物の持続とは畢竟その存在における時間の継続性にあると思われる。ただし伊勢神宮は式年遷宮によって物質的には定期的に総入れ替えされ続けているにもかかわらず、日本人にとっては絶えず本物であり続けて

いるという事例があることは付け加えておかねばならない。象徴性が、物質性とそこに付随する時間の継続性(=建築としての存在)を超越しているという点で建築的には極めて特異な事例といえよう。

「実験装置」

今回のマジアにおける修復・再生はいくつかの試みが複合したものである。その中で注目すべきは壁体を残して内部に鋼構造の構築物を挿入した A1 棟(「実験装置」)であろう。元の建物の一部である壁体を、物質のもつ時間を継承する存在として象徴的に存置しつつ、まったく新たな機能を鋼構造という物質存在とともに内部空間へ挿入するという建築家による方法は斬新であり、これまでの建物保存手法のパラダイムを変えるくらいのインパクトがあるように思われる(写真 9)。従来の保存については、建築史的な価値観に立脚する場合には歴史的な価値(象徴性)は当然として、当初材(物質)の保存や意匠的な復原を重視しており、物質的側面・意匠的側面・象徴的側面を統合して存続させ

ることを意図していると考えられる。ファサード保存の場合はファサード部分における意匠と、場合によってそれを構成する物質の存続を眼目とした保存手法であるが、建築的行為としての主な関心はむしろ新たに付加される空間や機能にあるといえよう。金閣や三菱一号館などにみられる再現は、構法まで含めた純粋な意匠的側面の保存とみなすこともできるが、建物としての保存であるとするかどうかは先に触れたように議論の分かれるところである。今回の「実験装置」で試みられた方法は、物質的な時間の存在の中に新たな空間・機能を挿入あるいは併置するという方法であり、ファサード保存に類似するといえなくもないが、既存部分と新設された部分が等価な状況で対立しつつ共存するという関係を作り出しているという意味において、全く別の次元にあると筆者は考えている。この併置されたふたつの物質的存在の間で、これからの時間の流れと建築としての記憶がとぎれることなく継承されていくことを望みたい。

(こまつ ゆきお)